

Wilkinsonのロンドン、啓示の小休止

翌日はまったくの自由な1日だった。

約束なし。

予定なし。

運転手なし。

儀式なし。

ピカデリー・サーカスを歩いていると、目はいつも同じ方角へ流れていった。

ソーホー。

若い頃、私はああいう場所に迎え入れられていた。

客としてだけではない。

観察者としても。

歓迎される客。

大っぴらに歓迎される客。

年を重ねるうちに、弱さは隠すべきものではないと学んだ。

理解すべきものなのだ。

そして誰も傷つけないのなら、私たちに悦びをもたらすもので養ってやってもかまわない。

急がずに歩いた。

ロンドンはいつもより静かに見えた。

街が変わったのかもしれない。

私が変わったのかもしれない。

あるいは、ただマギーの影響だったのかもしれない。

彼女に会ってからというもの、どの通りも物語を語っているように見えた。

どの建物も記憶を守っているように見えた。

街のどの角も、もうそこにはいない誰かのものであるように見えた。

初めて、私はロンドンを訪れているのではなかった。

ロンドンに耳を傾けていた。

そして灯りと、観光客と、わが青春の古い亡霊たちのあいだを抜けてピカデリー・サーカスを渡りながら、これは休息の日ではないのだと悟った。

ひとつの教えと次の教えのあいだの、ただの幕間だった。

翌日にはまた叔母に会うのだから。

そして彼女とともに、おそらくは、まだ誰も語り終えていない物語のもうひとかけらに。

フェルディナンド